

石巻支援活動報告

埼玉地区 和戸教会牧師 三羽善次

教区「被災支援委員会」の要請により、5月30日(月)より6月1日(水)まで、埼玉地区から6名と栃木地区の平山正道牧師(四條町教会)の計7名で宮城県石巻の支援活動に行ってきました。埼玉地区のメンバーは土橋地区委員長(飯能教会)、谷脇正紀牧師(草加教会)、長尾愛子姉(小川教会)、山岡創牧師(坂戸いずみ教会)、飯野敏明牧師(本庄教会)そして三羽の面々でした。

今回は埼玉地区で集められた夏物を中心とした衣類と韓国の教会より送られてきた新品の下着、四條町教会で集められた衣類を2トントラックに積み、他にワゴン車1台と共に現地に赴きました。30日は夜8時半に大宮教会に集合して、荷物を運び入れ、宇都宮の四條町教会に寄り、深夜の高速道路を一路、石巻を目指して走りました。

現地のボランティア活動センターの総括をされている同志社大学神学部在学中の高濱心吾兄と川上盾牧師(東神戸教会)、他二人の女性の方と落ち合い、教会員の方の庭に行き、さっそく衣類のフリーマーケット(無料バザー)をしました。この間、川上盾牧師がギターの弾き語りで心にしみる歌を歌い続けて下さいました。また谷脇牧師が連れてこられた子犬が、子どもや大人に可愛がられ癒しを与える時となりました。

午後には、避難所となっている庭先に移動して、フリーマーケットをしました。マーケットを広げた場所が幹線道路沿いにあつたので、通行されている方や向いの避難所の方などが人だかりを見て、次々とやってこられました。70人から80人位の人達が集まってくださり、一時はどうなる事かと心配していただだけに、嬉しい限りでした。ここでも用意した衣類が次々と必要とされる方の手に渡っていきました。この後もう一箇所、避難所でのフリーマーケットを開きました。ガスや水道もいまだ充分復旧していない場所で、手作りの簡易風呂が設置されていました。一人の婦人より「何の縁もない方が遠くの地まで来て下さり、ありがたい」と言われた事が感謝でした。

その日は仙台北教会に泊めていただき、翌日は石巻栄光教会の附属幼稚園の降園時間に合わせて、フリーマーケットを開きました。四箇所のフリーマーケットで、積んできた衣類の八割ほどを配布する事が出来ました。

活動の合間に、石巻市内を一望できる日和山(ひよりやま)公園に案内されました。何もなかった頃なら、ここは絶好の観光の場所であったでしょうが、今はただ石巻の津波の被災がどれ程すさまじいものであったかを、目で確認する場所になっていました。日常生活の場が、見渡す限り根こそぎもぎ取られた光景が180度のパノラマのように広がっていました。

また、東北教区の支援センター「エマオ」を訪問して、その日の支援活動に出る前のミーティングと祈りの場に出ました。総括されている方から、これまで働きについてお話を伺い、相手の立場に立ち、心をつないでいく事の大切さを教えていただきました。わたしたちが全ての支援活動、訪問を終えて、大宮に帰ってきたのは午前12時頃でした。全て主に守られて奉仕できましたことを、感謝致します。

星のようなきらめき

三村 修（佐渡教会牧師）

新生釜石教会へ

5月30日夜、新潟地区の4人が教会に到着。蝋燭の光の中でオリエンテーションを受けました。トイレは教会のトイレが使える、大は隣の病院駐車場の仮設を使うこと、津波警報が出たら隣の公園の階段を駆け上がること、大雨洪水警報が出たら隣の病院の非常階段を駆け上がることなどでした。

家財の運び出し（5月31日）

カリタスジャパンがカトリック釜石教会にボランティアの拠点として釜石ベースを開設していました。そこへ「駒木山不動寺・新生釜石教会ボランティアセンター」から何人かを送ることになり、カトリック教会へ。まずミーティング。カリタスの方から注意事項を伺い、最後にシスターのお祈り。そこでさらにグループに分けられ、私は5人のグループの1人として釜石市社会福祉協議会のボランティアセンターへ。センターでは被災者からの要望を集約しボランティアを派遣していました。そこで手続きを済ませ、私達は現場へと向かいました。



私達の現場は唐丹駅の裏の民家で、依頼された仕事は、庭にブルーシートを広げ、家財を運び出してそこに並べる、というものでした。探して欲しいもののリストがあり、その筆頭が仏壇のロウソク立てでした。

依頼主は初老の男性で、私達と一緒に作業をされました。休憩時間用に私達のための菓子パンと飲み物も用意してくださっていました。言葉少なく語られたことは、3月11日は盛岡に出掛けていて無事だったけれども、妻は釜石の工場で被災し亡くなった、ということでした。本当はもっと語りたことがあったと思いますが、私もどんな言葉をかけて良いのか分からず、ただただうなずきながらお伺いするほかありませんでした。泥にまみれた食器や調理器具はすぐ近くを流れている川で洗いました。

がれき処理（6月1日）

6月1日の作業は教会の前の通りに積まれている瓦礫の入った土嚢を撤去することでした。「駒木山不動寺・新生釜石教会ボランティアセンター」が社会福祉協議会に依頼して派遣してもらったボランティアの人たちが数名、私たちに加わりました。借りてきたトラックにひたすら土嚢を積みこみました。土嚢の中に釘やガラスの破片が入っており土嚢を持つ時にも注意が必要でした。土嚢に入っていない瓦礫も残っていたので、瓦礫を土嚢に詰める作業もしました。

淀川キリスト教病院の看護師の方が、傾聴ボランティアとしておいでになっていました。その方に、昨日の私の経験をお話し、あのような場合、どのような言葉かけが可能だったのかを伺いました。その方の答えは、事実を尋ねても、話してもわからないと思われる、話を聞いて自分が感じた気持ちを返す、相手の気持ちに対して、気持ちで応えれば良かった、ということでした。

星のようなきらめき

被災後第12主日の新生釜石教会の週報には次のように記されていました。「津波以後街では懸命に復興への努力が続いている。電気・ガス・水道の復旧、がれきの処理が急務である。『復』という字が使われるがどこに戻るというのだろうか。私は災害前の世界に戻ることに違和感がある。復興復旧が進むにつれて、津波直後に見えていた星のようなきらめきが見えなくなっていないだろうか。元の生活に戻ることで神の国、神の愛がわからなくなっていくのだろうか…」星のようなきらめきに共に与らせていただくことを願いながら、被災地と共に歩ませていただきたいと思います。